

年間第三十三主日

2011.11.13

マタイ 25・14-30

2011年の今年の典礼暦も、今日は年間第三十三主日、そして来週は王であるキリストの祭日を残すだけとなりました。今年の年間主日ごとに順を追って御一緒にたどって来た、マタイ福音書に記されたイエスのユダヤの人々の中での公の活動の足跡にも終止符が打たれようとしています。今日と来週の福音は、イエスはその公の活動の最後に語られたことばを伝えています。イエスは私たちが今日と来週のミサの中で聴く、この最後のことばを残されて受難に向われたのです。このようなマタイ福音書の構成に従えば、私たちになじみ深いものとなっている、今日の福音のタラントンのたとえ話は、イエスが私たちに残された最後のメッセージとして語られていることとなります。

たとえ話そのものは、それを聴く人の受け止め方に委ねられています。だから、今日の福音のタラントンのたとえ話も、私たちがそこから何を学び取るかは私たちに委ねられています。けれども、イエスが語られたこのたとえ話を、イエスの最後のメッセージとしてここに収録したマタイ福音書は、このたとえ話に込められたイエスの特別な思いを私たちに伝えようとしているのです。

今日の福音は「天の国は次のようにたとえられる」というイエスのことばで始まっています。天の国について語られるとき、イエスは漠然と天の国について語っているのではありません。イエスが天の国について語られるとき、その天の国とは、イエスが私たちの中にもたらそうとしておられる天の国について語っておられるのです。マタイ福音書におけるイエスの公の活動の最初のおことばを思い出してみると、そこには「悔い改めよ。天の国は近づいた。」という宣言が響いています。「天の国は近づいた」というおことばをもって、その活動を開始されたイエスは、今日私たちが聴いた、天の国のたとえ話であるタラントンの教えをその活動の最後に語っておられるのです。このように考えるなら、たとえ話の中で、旅に出る主人がその僕たちに託したタラントンは、イエスが私たちにもたらそうとしておられる「天の国」なのだというふうにも受け止めることができます。

「悔い改めよ。天の国は近づいた。」とイエスは言われました。「悔い改めよ」とは、イエスがもたらそうとしておられる天の国に向って悔い改めよということです。何故イエスがもたらそうとしておられる、近づいている天の国に向って悔い改める必要があるのかと言えば、この世の生活を生きる私たちは、この

世のことだけに囚われたままでいては、イエスがもたらそうとしておられる天の国に心を向けることが出来ないからです。「悔い改めよ」とは、その囚われを越えて、イエスがもたらそうとしておられる天の国を受け入れよということです。

私たちはカトリック信者になることによって、イエスを信じる者となりました。イエスを信じるとは、私たちの中にイエスをお迎えするということです。私たちはイエスを信じて、イエスを私たちの中にお迎えすることによって、イエスが私たちにもたらそうとしておられる天の国を受け取らせていただいたのです。私たちがカトリック信者となることによって、信仰によって受け取らせていただいたはずの、イエスが私たちにもたらそうとしておられる天の国は今私たちの中でどうなっているのでしょうか。

今日私たちは、天の国についてイエスが語られたタラントンのたとえ話を聴きましたが、イエスが語られた天の国についてのほかのたとえ話を思い出してみたらよいかもしれません。種を蒔く人のたとえでイエスが語られた、わたしたちの中に蒔いていただいた種は、今、私たちの中でどうなっているのでしょうか。私たちの中のからし種はどうなっているのでしょうか。私たちの中のパン種はどうなっているのでしょうか。そして今日私たちがあらためて耳を傾けた、イエスが私たちに託してくださった高価なタラントンはどうなっているのでしょうか。これらのたとえ話でイエスは、イエスが私たちにもたらそうとしておられる天の国、私たちが信仰によってイエスから受け取ったはずの天の国について語っておられるのです。

「天の国」というマタイ福音書独特の表現にこだわるなら、「天の国」とは、この地上の生活を営む私たちの上に広がり、私たちを包んでいる「天の国」です。「天におられる私たちの父よ」という祈りをもって、イエスが私たちの教えてくださったように、私たちはこの地上の生活の中であって、そこから「天の国」に向かって、「天におられる私たちの父よ」と呼びかけることが出来る者たちとされたのです。私たちの地上の生活の全ては、その天の国におられる父なる神の、大いなる計らいのもとにあることを知る者たちとされたのです。「天の国は近づいた」と言われたイエスは、父なる神の天の国をこの地上に生きる私たちにもたらそうとしてくださったのです。

イエスに教えていただいた主の祈りを唱える時に、私たちが祈るその主の祈りは、どの程度私たちの生活の中に広がり、私たちの生き方を変えているのでしょうか。イエスが教えてくださった祈りを唱えることによって、私たちの心はどこまでイエスの想いと結ばれているのでしょうか。

このような反省をすることは、私たちにとって確かに苦しいことです。けれども、イエスが私たちに託されたタラントンはこのようなことの中にあるのです。

私たちはカトリック信者となることによって、この地上の生活を生きる私たちの中にイエス・キリストをお迎えしたのです。私たちが私たちの人生の中にお迎えした私たちが信じるイエス・キリストは、確かに私たちの中に「天の国」をもたらしてくださったのです。私たちにこのような貴重なタラントンを託されたイエスの想いは、私たちがそれを十分に活用することなのです。

たとえ話の中では、5タラントン預けられた僕は他に5タラントンの利益を上げ、2タラントン預かった僕は他に2タラントンの利益を上げたと言われています。けれども、たとえ話の主人はその二人の僕に対して「お前は、少しのものに忠実であったから、多くの者を管理させよう。主人と一緒に喜んでくれ。」と言っています。5タラントンも2タラントンも、主人にとってはわずかなものなのです。大切なことは、僕たちが主人の意を汲んで、それを精一杯活用したかどうかということです。これがこのたとえ話に込められたイエスの私たちへの想いです。イエスは、そのいのちのすべてをかけて私たちにもたらしたださった「天の国」が、私たちの中で活用されることを願っておられるのです。そして、これが受難の道に進み行こうとされているイエスの私たちへの最後のメッセージであるのです。今日のミサの中で、この世の生活を生きる私たちが、信仰によってお迎えしたイエスの想いに応えて、そのイエスがもたらしたださった「天の国」の貴重なタラントンを生かす決意を新たにしたいと思います。

カトリック高円寺教会
主任司祭 吉池好高